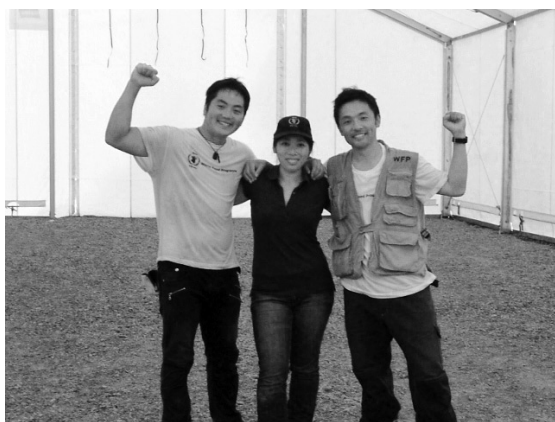




チャドの女性たち



陸前高田にて

ない人物がいれば、その人物との共通の言語（通常は英語）を話すようにすることがルールだった。もちろん現在の生活ではあまりにさまざまな言語が話されるため、必ずしも同じルールを適用しないが、そういった気遣いのようなものを学んだのはUWCだ。いかに双方のストレスを少なくするか、といったような配慮の方法とでもいうのだろうか。

そう考えると、真の国際化というのは、言語が話せるようになるということよりも、その裏にある多様性を受け入れる配慮の方法を知る、つまりは柔軟性を持つということではないだろうか。ではその柔軟性はどうかやったら身に付けることができるのかといえば、多くの違った文化と価値観に触れること、常にオープンな姿勢、視線を持つことだと思う。

例えばUWCでは、そういった練習をする

機会がふんだんに与えられていた。机を並べて共に勉強したのはもちろんだが、それ以外に、例えばコミュニティサービスの場や、合唱団の旅行、冬のスキー旅行や夏休みの旅行、夜のだんらんの時間のなかで、多くの違った価値観や文化に触れることができた。

確かに文化や異なる価値観を取り入れて自分を变えていこうとする作業はそう簡単ではないが、その面白さを知ってしまった。それほど楽しいことはない。実際、私自身はいまだその延長線にある。UWCで知ったさまざまな文化や価値観に触れ、自分を変えられていく面白さに魅せられて、国際公務員といういまの職業を選んだと思うのだ。

### 感謝と新しい挑戦

数年前、ウェールズでUWCの恩師に会う機会があった。南アフリカ人の彼は私にアフリカを、よくあるメディアの「動物王国」や「ニュースで見る栄養失調の子ども」のイメージとしてではなく、もっと自分に近い「隣人」であることを教えてくれた。恩師は当時すでにリタイアされていたが、お会いした際に、現在アフリカで食糧支援にかかわる仕事をしていることを伝えると喜んでくれ、出来の悪かった自分にも、彼の愛するアフリカに少しは恩返しができたと思え、うれしかった。

また、東日本震災の際には、WFP職員として緊急援助のお手伝いをする事ができたので、微力ながらも日本に恩返しをする機会になったかと思う。この経験は、緊急人道支援を生業としていることについて、あらためて日本人として誇りに思い、また自分と与えられた仕事に対しての挑戦心を新たにする貴重な経験にもなった。復興への道のりは長い、私もできることを続けていきたい。

最後になってしまったが、留学生として送り出してくれたくださった経団連の方々、UWC日本協会には心から感謝している。また、多くの挑戦心のある奨学生に、新しい世界を知る機会を設け続けていただけることを願ってやまない。

# 多様性と柔軟性を学んだ

## 二年間

国連世界食糧計画(WFP)チャド事務所

石井理江  
いしゐりえ

一九九三―一九九五年UWCアトランティック・カレッジ(英国)留学。二〇〇〇年セントアンドリュース大学卒業。アーサーアン・ダーセン・ロンドン事務所、デロイト・ロンドン事務所税務部門に勤務。二〇〇七年ロンドン大学にて修士号取得。二〇〇八年より現職。世界食糧計画ロジスティクス担当官としてローマ本部、タンザニア事務所を経て現在チャド事務所勤務。



### 現在 ― チャド共和国

私は現在、国連世界食糧計画(World Food Programme)チャド事務所食糧援助にかかわるロジスティクスの仕事をしている。日常および仕事で使う言語がフランス語なので、二〇一〇年に赴任したときには、二〇年ぶりに苦労しながら外国語を学ぶことになった。しかし、何よりも苦労するのは言葉ではなく、彼らの生活習慣に自分を慣らしていく作業である。文化も、言葉も、宗教も、価値観も違う同僚たちと共に日々の仕事を進め、日常生活を営んでいる。現在チャド在住の日本人は六人のみ。そんな外国人社会のなかで楽しくやっているといるのは、なんととってもUWC時代の経験によるところが多い。

チャド共和国はアフリカ中央部、サハラ地域に位置する世界でも最も貧しい国の一つである。最近では近隣国の政情不安による帰還民、スーダン・ダルフル地方、中央アフリカからの難民に加え、東部チャドの治安悪化により国内避難民問題も抱え、国内での食糧不足と相なり、緊急人道支援を必要としている。いまのところ政情は安定しているものの、反政府軍勢力は依然として残っており、決して安全とはいえない状況が続いている。そのような状況のなかでは、勤務をいかに楽しめるかどうかで生活、仕事の質が大きく変わってくる。なぜなら、価値観の違いからくる理解の違いなどによりフラストレーションがたまりやすくなり、日常のささいな出来事にもストレスがたまっていくからだ。それ

●ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四五三名の卒業生を輩出している。

により精神的・肉体的に疲労し、正確な判断が下せないようなことになれば命にかかわる問題になる可能性もあるため、いかにストレスをためずに日常生活を送るかが非常に大切になってくる。そういった場合の対処の方法はおそらくいろいろあると思われるが、自分の場合はとにかくさまざまに起こる日々のトラブルをいかに笑い飛ばし、楽しめるかにかかっている。そして、私はその方法、違った価値観、変化の多い環境をうまく受け入れて対応していく方法をUWCで学ばせてもらった。

### UWC時代

UWCでは、宗教、文化、言語、慣習、価値観の異なる学生が五〇カ国以上から集まり、二年間共に暮らし、学ぶ。共通言語は英語であったが、英語圏からの学生は約四分の一ほどで、残りは必ずしも英語を母国語としない。このため、例えば日本人同士であれば日本語で話したくもなるが、そこに日本語を理解し